

神幸行事

神幸行事（神幸式）は、太宰府天満宮の最も重要な年中行事である。偉大な学者であり詩人であり政治家でもあった菅原道真公（845-903）の御霊が神格化された天神様が、天満宮御本殿から道真公の旧居跡まで堂々たる行列でお送りする。天神様を祀り、国の繁栄を祈り、秋の収穫に感謝する祭りである。

行事は秋分の日の前夜から始まる。天神様の御霊を豪華な神輿に移す儀式が行われる。担ぎ手は神輿を肩に担ぎ、精巧な装飾が施された御車に移した後、その御車を引いて市中を巡る。平安時代（794年～12世紀後半）の装束に身を包んだ数百人の参加者や伝統的な神楽の太鼓や鐘が行列に伴う。神幸行事は900年以上も前から同じ道を辿り、3時間かけて榎社まで2.5キロを行進する。榎社は、道真公が晩年を過ごした役人邸宅である南館がかつてあった地にある。

榎社に着くと、天神様は御本殿の裏にある小さな祠（ほくら）に運ばれる。これは、かつて道真公が苦難されていたときに手を差し伸べた老女、浄妙尼を祀る祠である。道真公は太宰府で困窮した暮らしを送っていたが、浄妙尼が梅の枝に刺した餅を届けてくれたという逸話がある。その厚意に対して、天神様は毎年浄妙尼を訪問してお礼を伝える。その後、天神様は榎社の本殿に遷され、神輿はその場所に夜通し置かれる。翌日の午後、行列は前日と反対の経路で進み、天神様を太宰府天満宮にお送りする。

1101 年、神幸行事は道真公を弔う目的で大宰権帥によって始められた。今日では、行事は太宰府市全域に及び、華やかな行列を見ようと多くの見物者で賑わう。また、道真公がかつて天に向かって祈るために登った天拝山など、太宰府周辺の道真公ゆかりの地も祭りの舞台となる。行事が始まる前に、天神様の神輿を担ぐ参加者は山麓の滝で清めの砂（御汐井）を集める。山頂で焚かれる火は、天神様が一時滞在している間に住民が祈りを捧げに訪れる榎社から見る可以看到。